



TITLE:

淋疾に対する Thiamphenicol glycinate(Neomysyn G)の使用経験

AUTHOR(S):

赤坂, 哲治郎; 片庭, 義雄; 水間, 圭祐

CITATION:

赤坂, 哲治郎 ...[et al]. 淋疾に対する Thiamphenicol
glycinate(Neomysyn G)の使用経験. 泌尿器科紀要 1974, 20(8): 551-554

ISSUE DATE:

1974-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/121693>

RIGHT:

淋疾に対する Thiamphenicol glycinate (Neomysyn G) の使用経験

日本大学医学部性病科

赤坂哲治郎

片庭義雄

水間圭祐

CLINICAL EVALUATION OF THIAMPHENICOL GLYCINATE (NEOMYSON G) FOR ACUTE GONOCOCCAL URETHRITIS

Tetujiro AKASAKA, Yoshio KATANIWA and Keisuke MIZUMA

From the Department of Venereology Nihon University School of Medicine

(Chairman: Asst. Prof. K. Mizuma, M. D.)

1. Thiamphenicol glycinate (Neomysyn-G) was administered intramuscularly to 20 male patients with acute gonococcal urethritis in a dose of 1 g daily for a period of 3 to 4 days, a total dose of 3 to 4 g, and the rate of effectiveness was as high as 80%.
2. The sensitivity of gonococcus to thiamphenicol glycinate was such that its MIC was distributed in the range of 0.25 to 4 mcg/dl, whereas the MIC of chloramphenicol determined in the same manner was in the range of 0.25 to 8 mcg/dl.
3. The result obtained in the sensitivity test of thiamphenicol glycinate by the disc method was not in agreement with the clinical result. This disagreement seemed attributable to the disc used in the investigation.
4. There were no adverse side effects of thiamphenicol glycinate throughout the treatment period.

はじめに

淋疾に対する第1選択薬剤としては、penicillin (PC) が最も有効で、その主座を他の薬剤にゆずらなかつた。しかし近年 PC 抵抗性淋疾の報告が散見されるようになり PC も往時の卓効を期待できなくなっている。また PC shock 等の不快な副作用のためか、その使用を嫌う臨床家も多く、淋疾に対して PC に代る安全で有効な薬剤の検索が必要と考える。

今回、われわれは淋疾 20 例に対して thiamphenicol glycinate (TP-G) を使用する機会をえたので、その治療成績を報告するとともに若干の基礎的検討もあわせおこなったので、その結果を報告する。

Thiamphenicol glycinate (TP-G) について

Chloramphenicol (CP) の同族体である thiamphenicol (TP) は純合成の広範囲化学療法剤で、その抗菌スペクトラムは CP とほぼ同様であるが体内で不活化されがたく、大部分は活性型のまま尿中または胆汁中に高濃度に排泄され、すぐれた抗菌力を示すとされている。

この TP は不溶性であるため水溶性として注射用に供されたのが thiamphenicol glycinate (TP-G) で Fig. 1 のような構造式を有する。

TP-G の血中濃度は、500 mg 筋注で投与後 30 分～1 時間で peak に達し、6.4～6.7 mcg/ml を示し、CP 500 mg 筋注時のそれよりはるかにすぐれている。

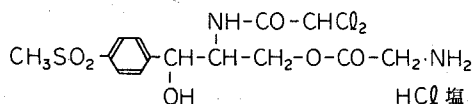


Fig. 1

また1g筋注では、投与後30分～1時間で peak に達し、そのさいの血中濃度は15～30 mcg/ml であるという。

臨床成績 (Table 1)

1) 症 例

使用症例は1972年～1973年に当科外来を訪れた急性淋病患者20例を対象とした。全例ともに男子で急性淋菌性尿道炎の患者であり、合併症を有するものはなかった。

2) 投与方法および効果の判定

TP-G 1g, 1日1回筋注とし3～5日間、総量3～5g投与し、来院時と投与後毎日連続して尿道分泌物の単染色標本を鏡し淋菌、多核白血球などの推移を観察した。培養は来院時、治療終了24時間後、誘発試験後と3回おこなっている。治癒判定としてTP-G投与により自覚症、他覚所見の改善したものにつき1

週間後、誘発試験（飲酒）をおこなって再燃のないことを確認し治癒と判定した。

効果の判定は、自覚症状の改善、淋菌、多核白血球の消失、淋菌培養陰性を目標とし、再燃もなく治癒判定に合格したものは有効、それに反したものは無効とした。無効症例に対しては、薬剤を ampicillin (AB-PC), tetracycline (TC), cephaloridine (CER), PC-G+Probenecid 等に変更し投与した。

臨床成績は急性淋菌性尿道炎20例中、有効16例、無効4例で、有効率は80%という好結果であった。

淋菌の薬剤感受性

1) TP および CP に対する感受性

患者より分離した淋菌20株について力価既知のTPおよびCPを用い寒天平板希釈法で32mcg/mlより2倍希釈で最小発育阻止濃度（MIC）を測定した。両者の感受性分布はTable 2, Fig. 2のごとくでTPは0.25～4 mcg/ml, CPは0.25～8 mcg/mlの分布域を示している。

淋菌に対するTPとCPの感受性相関は、Fig. 3のごとくで両者に弱い相関が認められた。両者の感受

Table 1 Thiophenicol glycinate (Neomyson G) の淋疾に対する治療成績

症 例	年 齢	投与 日数	投与 量 (g)	治 療 前				治 療 後				治 癒 判 定	効 果	副 作 用	備 考
				自覚症		他覚所見		自覚症		他覚所見					
				P	S	G	W	P	S	G	W				
1	21	3	3	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	CER に変更
2	24	4	4	卅	十	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
3	26	5	5	卅	卅	卅	卅	十	—	十	卅	×	一	なし	
4	40	3	3	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
5	19	3	3	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	AB-PC に変更
6	43	4	4	卅	十	卅	卅	卅	十	卅	卅	×	一	なし	
7	28	4	4	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
8	30	4	4	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
9	36	3	3	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	PC-G+Probenecid に変更
10	32	3	3	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
11	30	3	3	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
12	21	3	3	卅	十	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
13	18	4	4	卅	十	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	CER に変更
14	21	3	3	卅	卅	卅	卅	卅	—	卅	卅	×	一	なし	
15	24	3	3	卅	十	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
16	26	4	4	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
17	31	3	3	卅	卅	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	CER に変更
18	23	4	4	卅	十	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
19	23	3	3	卅	十	卅	卅	—	—	—	—	○	十	なし	
20	50	4	4	卅	十	卅	卅	卅	十	十	卅	×	一	なし	

全症例 男性 P: 排膿 G: 淋菌 S: 排尿痛 W: 多核白血球

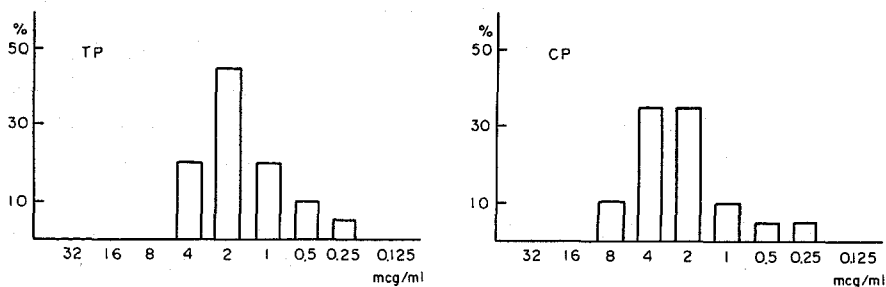


Fig. 2. 淋菌 (20株) の感受性分布

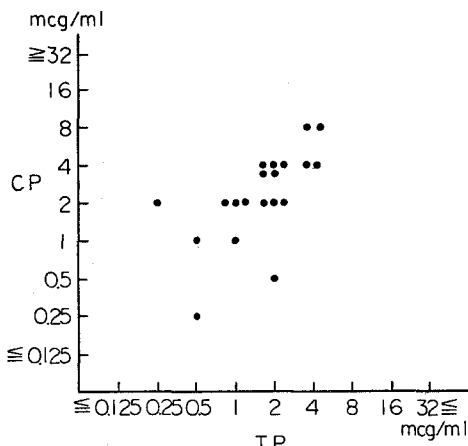


Fig. 3. 淋菌に対するthiophenicol と chloramphenicol との感受性相関

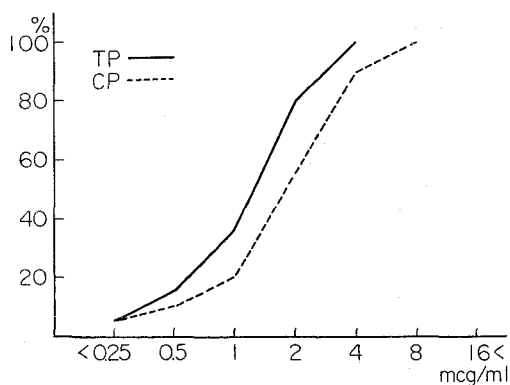


Fig. 4. 淋菌の TP, CP の感受性累積度数曲線

Table 2. 淋菌に対する thiophenicol と chloramphenicol の最小発育阻止濃度 (20株)

Drug	mcg/dl									計
	≥32	16	8	4	2	1	0.5	0.25	0.125	≥
TP	0	0	0	4	9	4	2	1	0	20
CP	0	0	2	7	7	2	1	1	0	20

性累積度数曲線を Fig. 4 に示す。TP は CP に比しやすくなっているといえる。

2) 淋菌に対する各種薬剤の感受性

分離20株の3濃度 disc 法による感受性は Table 3 のごとくである。淋菌に対しては AB-PC が最もよく、PC-G, TC, kanamycin (KM), CP, CER が好感受性を示している。これに反して streptomycin (SM) は Willcox も指摘しているように、淋菌に対する効力を失っていることがわかる。TP は disc 法では他の薬剤に比し感受性がわるい。しかしその臨床成績は有効率80%という好成绩で、他の薬剤より劣っているとはいえない。

TP における感受性 disc の問題点

臨床医が感染症に対する薬剤を選択する基準の一つとして disc 法による薬剤感受性成績を参考としている。しかし感受性試験で得られた結果は、あくまで *in vitro* における抗菌力であり、host-parasite の諸条件を考慮し薬剤を選択せねばならない。disc 法によ

Table 3. 3濃度 disc 法による淋菌の各種薬剤に対する感受性

薬 剤	PC-G	AB-PC	TC	CP	EM	SM	KM	CER	NB	TP
感 受 性										
+++	19	20	19	17	15	2	18	17	8	6
++	1	0	0	2	2	2	1	3	8	7
+	0	0	1	1	1	1	1	0	3	2
-	0	0	0	0	2	15	0	0	1	5

る感受性試験の結果は、培地の種類、pH、寒天平板の厚さ、接種菌量、培養条件、拡散、溶出などの諸因子に左右される。disc 法では TP は淋菌に対して感受性は良好といえない。しかし寒天平板希釈法による MIC 分布域は CP よりやや低く、両者の感受性累積度数曲線をみると TP がわずかながら感受性がよいといえる。また臨床成績も良好であり感受性 disc による成績との不一致がみられた。この原因は、感受性 disc の成績を左右する上記の諸因子のなかで拡散、溶出があるく、そのため他の成績との不一致をみたものと推定される。

ま と め

1. 男子淋菌性尿道炎患者20例に対して、thiamphenicol glycinate 1g, 1日1回筋注, 3~4日間, 総量3~4g投与で有効率80%の好成績を得た。近年PC抵抗性淋疾の報告が相次いでおり、PCに代るべき薬剤としてTC, KM, CERなどが使用されいちょうの成果をあげている。TP-Gも淋疾の第1選択薬剤

として使用できるものと考える。

2. 淋菌に対するTPの感受性はMIC 0.25~4 mcg/mlの分布域を示しており、同時に測定したCPでは0.25~8 mcg/mlであったが、両者の感受性を比較するとTPがややすぐれていた。

3. Disc法による淋菌の各種薬剤感受性はAB-PC, PC, KM, CP, CERなどの感受性成績が良好であったが、SMは淋菌に対してその効力を失ったといえる。TPはdisc法による感受性成績と他の成績が一致せず、TP感受性discに今後の検討を要する。

4. 重篤な副作用はみられなかった。

文 献

- 1) 黒川・ほか：西日泌尿, 33: 606, 1971.
- 2) 石神・ほか：Chemotherapy, 15: 127, 1967.
- 3) Willcox, R.R.: Brit. J. Venere. Dis., 46: 217, 1970.
- 4) ネオマイゾンG文献集, エーザイ, 1972.

(1974年5月27日受付)

東京女子医科大学腎センター助手募集

東京女子医科大学においては、下記の要領で助手の募集をおこなっております。ふるって応募ください。

対象：各種腎疾患、透析療法、代謝、一般外科、人工臓器、臓器移植、移植免疫、組織適合性検査、臓器保存、などの臨床ならびに研究に興味をもたれる医師

募集人員：若干名

応募資格：卒業年次経験不問

待遇：東京女子医科大学助手としての待遇ならびに給与

締切：1975年3月10日

申込ならびに問合せ、

東京女子医科大学腎センター

〒162 東京都新宿区河田町10

電話 03 (353) 8111 内線 647

太田 和夫, 杉野 信博